

一、聴講者概数 六〇〇名

別の報告書控えには聴講者数男八六〇名、女四〇〇名、計一二六〇名、講義時数各五時間、謝金各三〇〇〇円と記されている（『自昭和二十二年三月文部省関係生徒課』）。

⑬ 終戦前後の学生生活

白根 光夫

〔本篇は白根光夫氏（昭和二十三年油画科卒）に執筆して頂いたものである。〕

私が東京美術学校油画科に入学したのは昭和十八年であった。国は二年前、既に所謂「大東亜戦争」に突入していた。三十五名の同期のクラスの中で、現役で入学出来たのは僅か五名で、あとは浪人九年というのが筆頭で、みんな錚々たる浪人の強者ばかりで、我々現役は、この小僧ッ子がとばかり連中に見下されていた、そんな感じがあった。美術学校油画科といえ、凄い天才ばかりだろうと、クラスの人たちの絵を見ていたけれど、そんなでもないやと、ホッとした事は確かだったが、一人だけ、これは凄いなと思ったのがいた。その男は間もなく気が狂ってしまった。

入学した当初から画材不足に悩まされ、キャンパスは、ヌードの固定ポーズを描き上げて提出し、それが教室からもどって来ると、必ずホワイトで塗りつぶし、次の制作に当てていた。解き油も不足がちで、仲間の一人は、筆が石鹼で洗えるのだからと、石鹼水を解き油の代わりにしたりした。ヌードの為の暖房の燃料も不足

し、動物園との境の板塀を金網を残して壊し、ストーブの燃料にした事もあった。

ともあれ、みんなはあと一、二年で軍隊に行き、何れ国を守る為に死んで行くのだと覚悟していて、材料不足だろうが、食料不足だろうが、この現在を「描く」ということで充実させようと懸命だった。その頃の「描く」というのは、描写技術を向上させる事だったし、又、絵画とは一体何だという問題もあり、その二つの相剋に夢中になっていた。

こうして、瞬く間に一年たち、昭和十九年、教授・助教授の人事に大変動があった。つまり、それまでの官展系の先生方が止めて、在野系の先生方に代わったのである。油画科は教授に梅原龍三郎・安井曾太郎、助教授に久保守・裕伊之助、やや遅れて伊藤廉の方々が就任され、日本画科は教授に小林古径・安田靉彦、助教授に田中青坪・山本丘人、講師に奥村土牛ほかの方々が就任された。私たちは、あの梅原・安井が教えて下さる！と興奮したのだが、同期の人の中には、えーッ、あんな画家たちが、とがっかりして、教室に出て来なくなった人たちも可成りいた。だが、もうその頃は、クラスの人たち半分以上は軍隊に行ってしまったいて、残った人たちも、勤労動員という事で、学校に行けない月が何度もあった。

勤労動員といっても、工場に行き体力を使わなければならぬ事は稀で、例えば、航空隊に派遣されると、既に飛行出来る練習機は不足し、模型の操縦席の中で飛行訓練をする様な状態になっていて、その模型の置いてある部屋の下部一面に、恰も空中を飛んでいる事を実感させる為に、空中から見た地上の様子を描く………といった



福島コレクション見学の一行
前列右より久保守、梅原龍三郎
(白根光夫氏提供)

まじっていた。動員中は先生も学生もみんな一緒に飯を食い、一緒に寝ていたわけだった……。そのため、教室のなかだけで体験する先生と学生との触れ合いとは違う親密さを味わったのである。

奈良の航空隊の時の引率は日本画の村田泥牛先生で、航空隊は新薬師寺や白毫寺の近くであったので、日曜には先生と色々な寺をまわった。特によかったのは法隆寺の時だった。その頃は金堂壁画の模写の最中で、その画家たちの中に泥牛先生の仲間もいたので、壁画模写の現場に入る事が出来、あの壁画を間近く鑑賞出来た。食料は不足状態で、昼飯は鹿の餌にする鹿煎餅を買い、むさぼりながら歩き回っていたのである。室生寺までも足をのばしたし、唐招提寺からは歩いて隊に帰った事もあった。

そんな事をしている中に私は二十歳になり、三月、海軍に入隊した。敗戦の日の八月十五日は、茅ヶ崎の陸戦隊に派遣された翌日であって、近かったので割りと早く自宅に帰る事が出来た。渋谷にあった自宅は戦災で焼けていて、自由が丘にあった兄の家に帰ったの

事をやらされたのである。館林・甲府・奈良の陸軍航空隊、館山の海軍航空隊等々に行かされた。その都度、引率する先生方が違い（久保守、碓伊之助、村田泥牛といった方々）、学生は各科入り

学校での授業が何時始まったのか？ 何しろ、予想もしない凄まじい混乱を引き起こした敗戦後の世の中に巻き込まれ、いろ／＼の事をしていたので、頭の中がゴチャ／＼になってしまつて、一向に正確には思い出せないのだが、多分、二十一年の春頃から再開したのではなかったか……。

やっと授業が始まってみると、同期の浪人組の連中は殆ど帰って来ない。それも、戦死したのか、生きているのか全くわからなかったが、彼らは復員が遅くて、一期、又は二期のクラスに編入されていた。戦没死が判ったのは三名で、行方不明の数は十名ぐらいだった。再開された時点でのクラス編成は、人数が少ないので一期上の人たちと一緒にされた。それでも正規の三十五名には満たず、梅原教室としては二十名ぐらいだったろうか。

復員して来た我々を、梅原先生も安井先生も大喜びで迎えて下さった。我々も、戦争で死ぬ筈だったのに、再び絵が描ける喜びで、狂った様に仕事を始めた。画材不足は戦中と同じだったが、西洋美術史の児島喜久雄先生から「君たちは幸せだ。ワラ半紙と鉛筆さえあれば、どんな傑作でも出来るのだから」というお言葉を戴いて、大いに勇気づけられた。

或る時、梅原先生から「何か希望はないか」と尋ねられ、「戸外の緑の中で裸婦を描きたい」と申し上げたら、「それはいい事じや。面白い。夏休みにやろう」と言われ、その夏、それは実現し

た。花壇の木陰でポーズする事にし、蚊がすごいので蚊取り線香をたき、シュミーズ一枚の坐りポーズでそれは始まった。梅原先生も一日おきぐらいいに來られた。昼飯は一緒に、戦後の食料難の時だったから、みんなは唐もろこしの粉の団子とか、芋とかの代用食だったが、先生は重箱に入った豪華な弁当だった。この時の仕事の有様は本当に印象深い。

戦争中は、外国の新しき美術の動向は全く紹介される事はなかったが、この時期、一挙にフランス、イタリー、アメリカ等の新しい作家の画集が、色刷りの本としてどん／＼入って來た。それまでは、僅かに九段下に近い井上美術書店で、モノクロのいろ／＼な画集を見ていた我々は、大変な時代がやって來つたと瞠目したものだ。そんな氣配を梅原先生はお察しになって、この者たちに近代西欧の良い作品を見せなければならぬと、伊豆に疎開してある福島コレクション（現在はブリヂストン美術館の収蔵品になっているピカソ・マチス・ルオー等の傑作）を見に連れて行く事を思いつかれた。しかし、全員を連れて行っても仕方ないと、先生は十二名の学生をお選びになり、他の人にわからない様にその十二人に告げる様にと久保先生にお命じになったのだった。選ばれた人たちは大喜びで、その秘密を守り、各自駿豆鉄道の荊山駅に集合、そして、ピカソ・マチス・ルオー等の傑作に直かに出会い、みんな興奮した。その上、先生の手配で大仁ホテルに泊したので、全く選ばれてよかったなあと、一同喜び合ったものだった。これは昭和二十二年の夏の事だったと記憶している。

それから間もなく卒業したのだったが、卒業制作は材料不足ゆ

え、自画像は出さなくてもよいという事になった。「もっと教えたいのだが、君たち、落第する方法はないものかな」（その頃の美校には、芸大における大学院にあたる研究科の制度はなかった）と、梅原先生はそんな事を仰言ったのであった。考えて見れば、我々が絵だけに集中出來たのは二十一年、二十二年の二年間のみだったのである。

⑭ 美校回想

岡田菊恵

〔本篇は女性第一回生岡田菊恵氏（旧姓川村。昭和二十六年油画科卒）に執筆して頂いたものである。〕

入学の動機

私が美校を受験しようと思ったのは、富士見高等女学校のとき的美術の先生で清水七太郎（大正六年美校西洋画科卒）という盛岡出身の方の勧めによるものだが、兄が曾宮一念の息子と立教中学の同期（二人とも戦死）だったこと、母の弟が院展に出品していたこと、祖父が円朝と並ぶ噺家で河鍋晩斎と交流があったことなど、美術に縁のある家庭に育ったことにもよる。

入学した頃

美校に入学はしたものの、キャンパス、絵の具はもちろん、木炭紙もパンもない。学校から前の生徒の描いたのを貰って、その裏に描いたが、藤島教室誰々などと書いてあるのを消して描くのだった。パンは、自宅で作れる人は蒸しパンを作って持って行ったが、それで消すと跡が残るので普通のパンのように具合よく行かな